

第7回委員会説明資料

(平成30年3月23日開催)

北部太平洋まき網のサバ類を対象とした
個別漁獲割当 (IQ) の導入に関する経営分析

1. サバ類を対象とした個別漁獲割当の実施状況

	実施期間	参加統数	個別割当合計 (トン)	漁獲実績 (トン)	消化率 (%)
平成 18 年漁期	導入せず	—	—	—	—
平成 19 年漁期	10月～1月(4ヵ月)	1ヶ統	2,700	不明	—
平成 20 年漁期	10月～6月(9ヵ月)	1ヶ統	4,970	不明	—
平成 21 年漁期	10月～5月(8ヵ月)	25ヶ統	156,546	102,281	65.3
平成 22 年漁期	10月～5月(8ヵ月)	26ヶ統	216,237	115,587	53.5
平成 23 年漁期	10月～6月(9ヵ月)	26ヶ統	335,224	106,366	31.7
平成 24 年漁期	9月～6月(10ヵ月)	27ヶ統	441,168	109,504	24.8
平成 25 年漁期	9月～6月(10ヵ月)	28ヶ統	386,357	184,276	47.7
平成 26 年漁期	7月～6月(12ヵ月)	26ヶ統	434,642	233,651	53.8
平成 27 年漁期	7月～6月(12ヵ月)	26ヶ統	464,684	264,374	56.9

注：1) 平成 26 年 10 月 1 日～27 年 6 月 30 日まで、5ヶ統が IQ 試験本格実施

2) 平成 27 年 10 月 1 日～28 年 3 月 31 日まで、全船（除く 2 そうまき）が IQ 試験本格実施

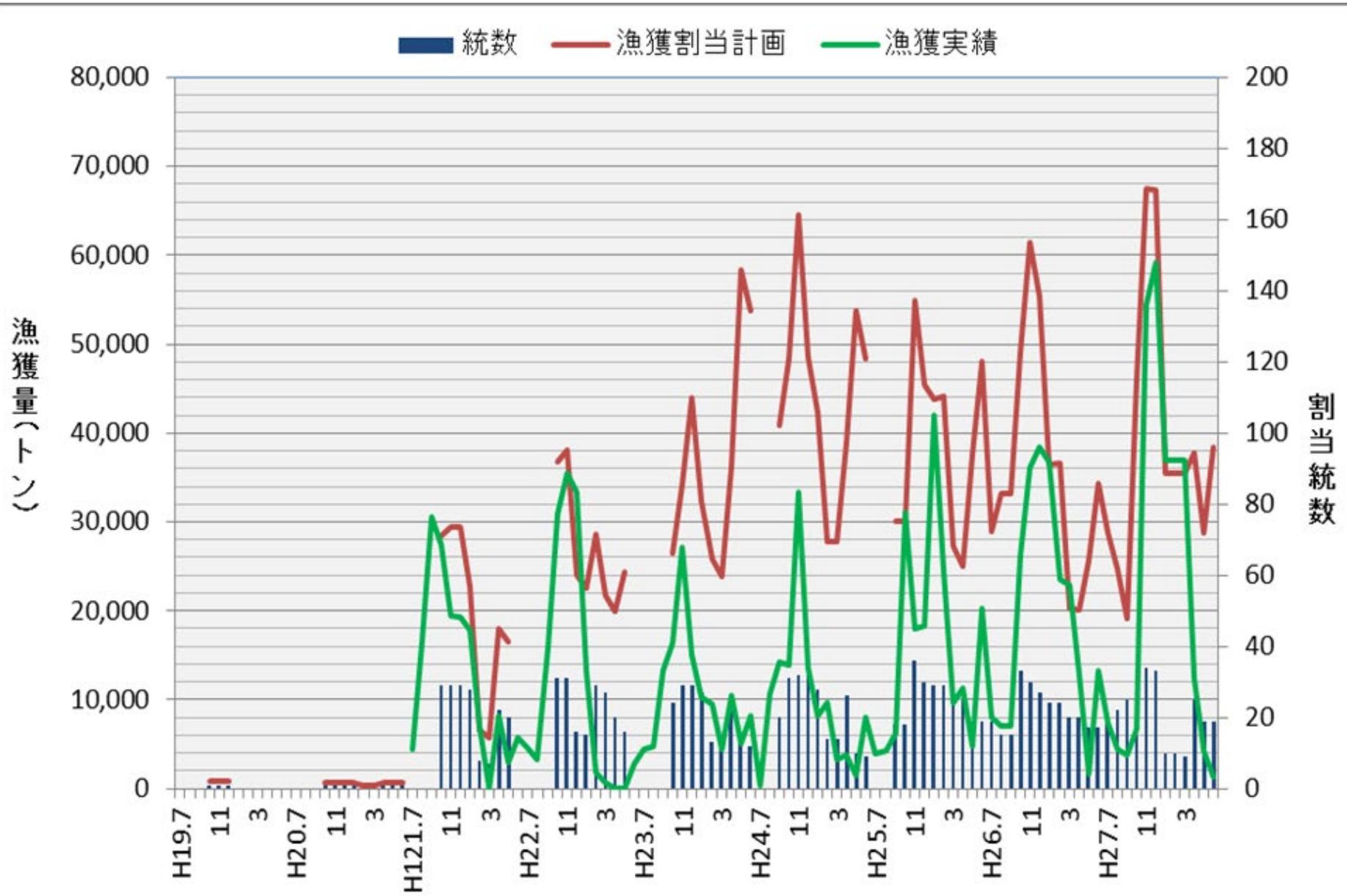


図1 北部太平洋まき網のサバ個別漁獲割当計画と実績の推移

資料提供: 北部太平洋まき網漁連

II. A船団におけるサバとその他魚種の水揚げ状況

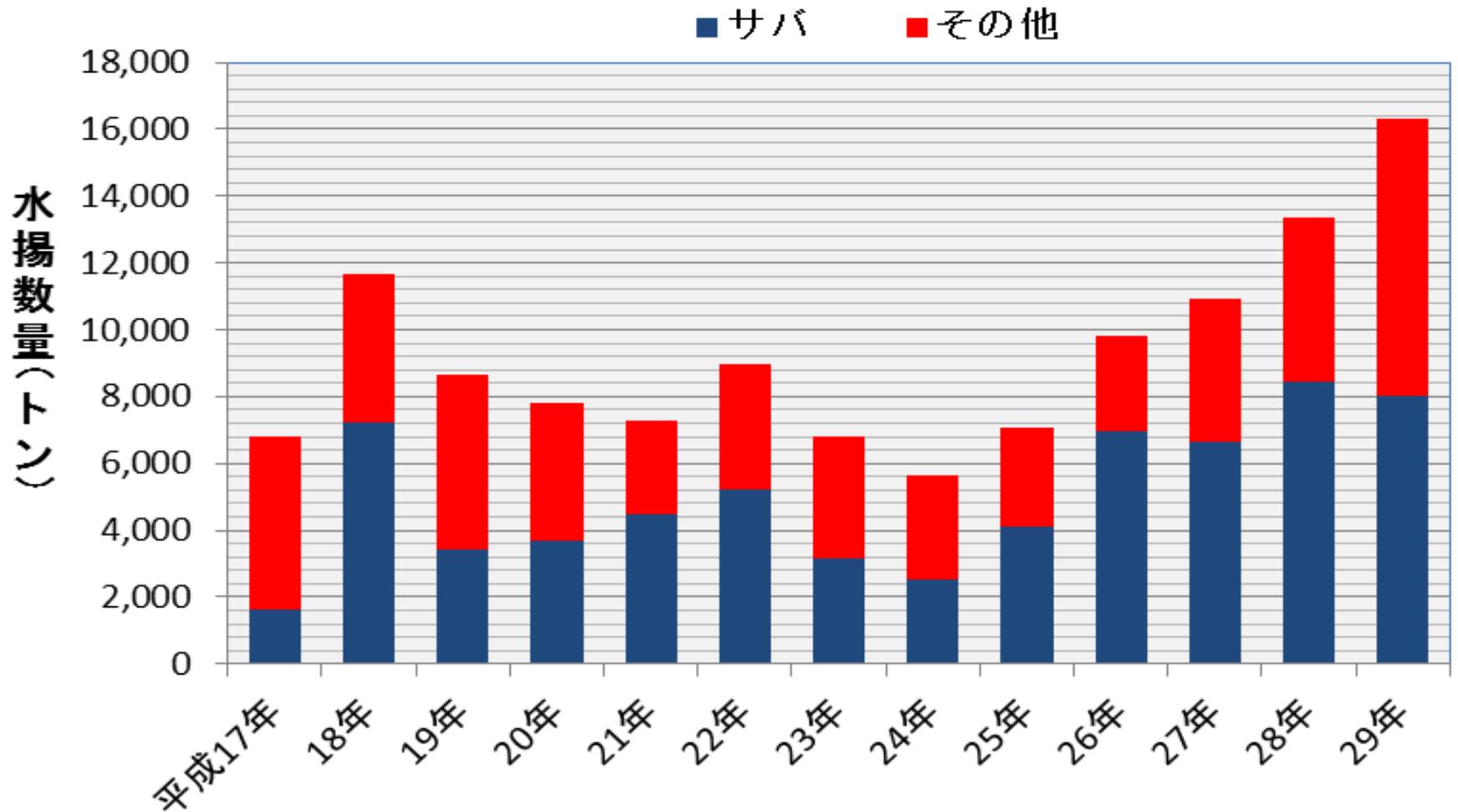


図2 A船団の水揚げ数量の推移(平成17~29年)

- 全水揚量に占めるサバの数量割合は年変動があり、50~70%の間で推移。

III. まき網漁船 (A船団) のサバ漁業に関する経営分析

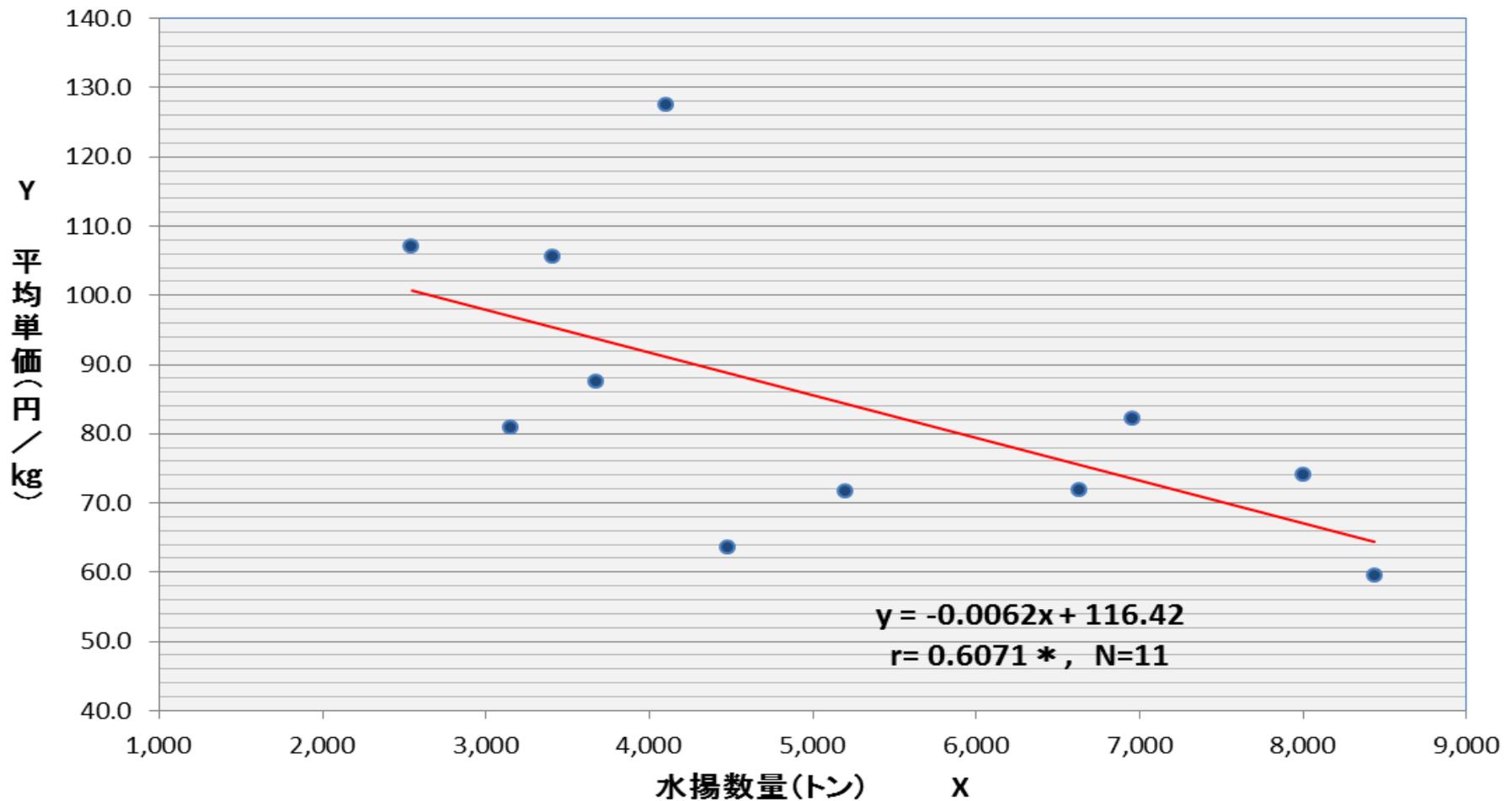


図3 A船団のサバの年間水揚数量と平均単価の関係(平成19~29年)

- 個別割当方式(IQ)に参加した以降のサバの年間水揚数量と平均単価の間には有意な相関関係(危険率5%)が認められる。

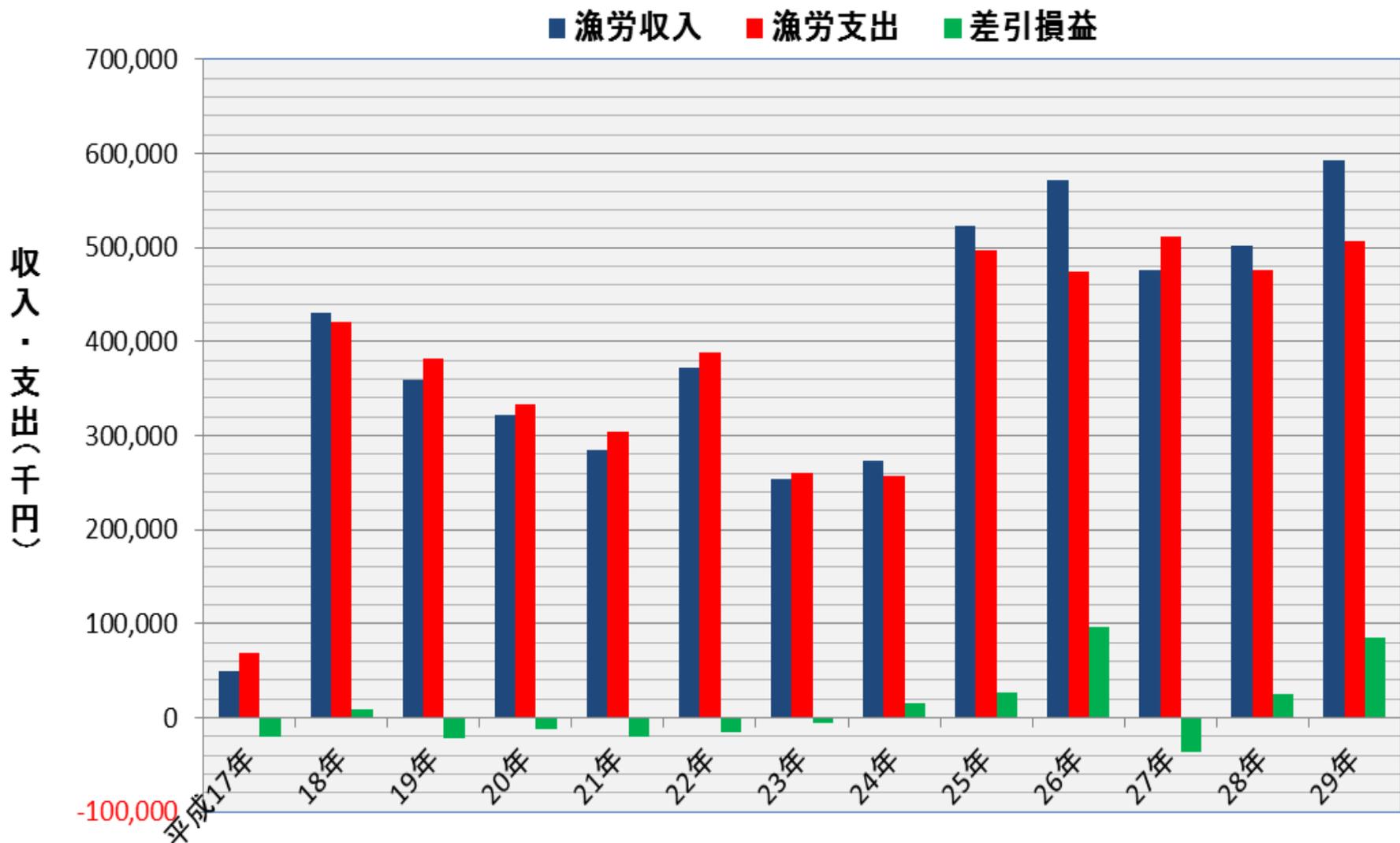


図4 A船団におけるサバ漁業の経営状況の推移(平成17~29年)

- A船団の経営は、平成19~23年の5年間はいずれも赤字であったが、24年以降は、27年を除き5年間はいずれも黒字となっている。なお、平成27年は小型のサバ(平成25年卓越年級群)が多くを占め、水揚金額が減少した一方、減価償却費と燃料費の増加が影響して赤字となった。

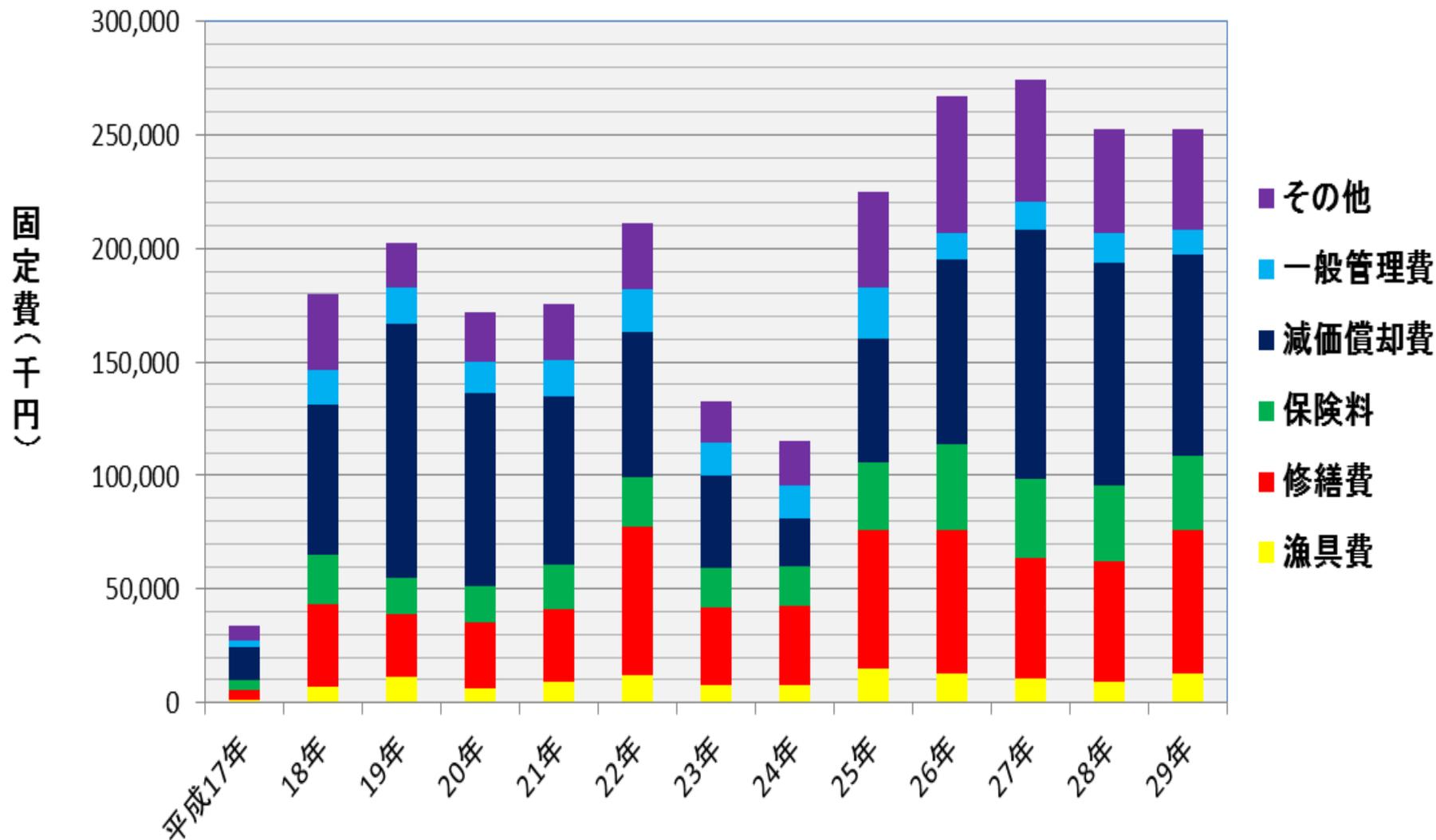


図5 A船団における固定費の費目別内訳の推移(平成17~29年)

- A船団の固定費の費目別内訳をみると、減価償却費と修繕費が大きな部分を占めており、しかも両者の年変動が非常に大きいことが解る。

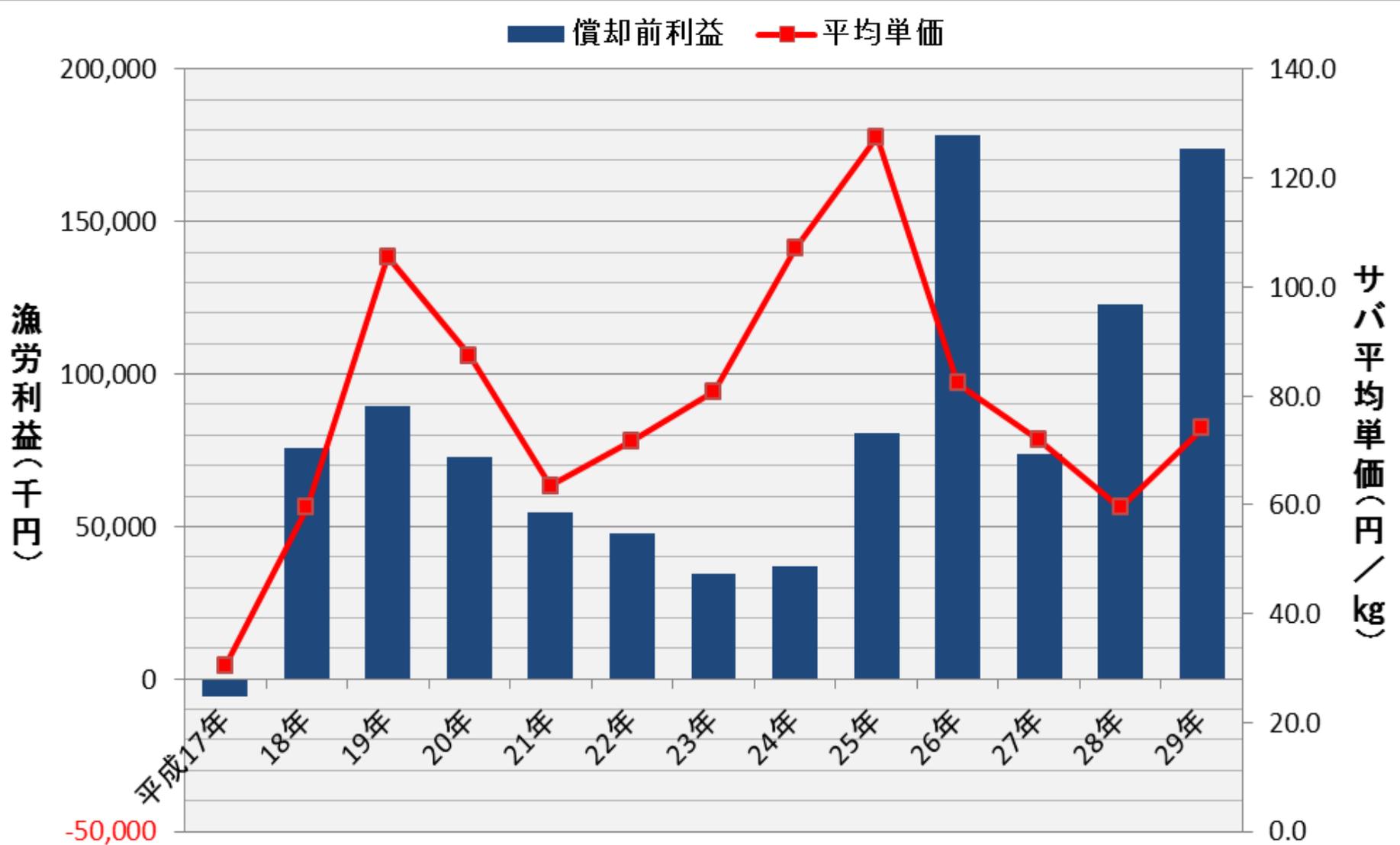


図6 A船団の漁労利益(減価償却前)と平均単価の推移

- 減価償却前漁労利益は、平成26年以降顕著に増加している。また、減価償却前漁労利益は魚価の変動の影響を受けていることがうかがえる。

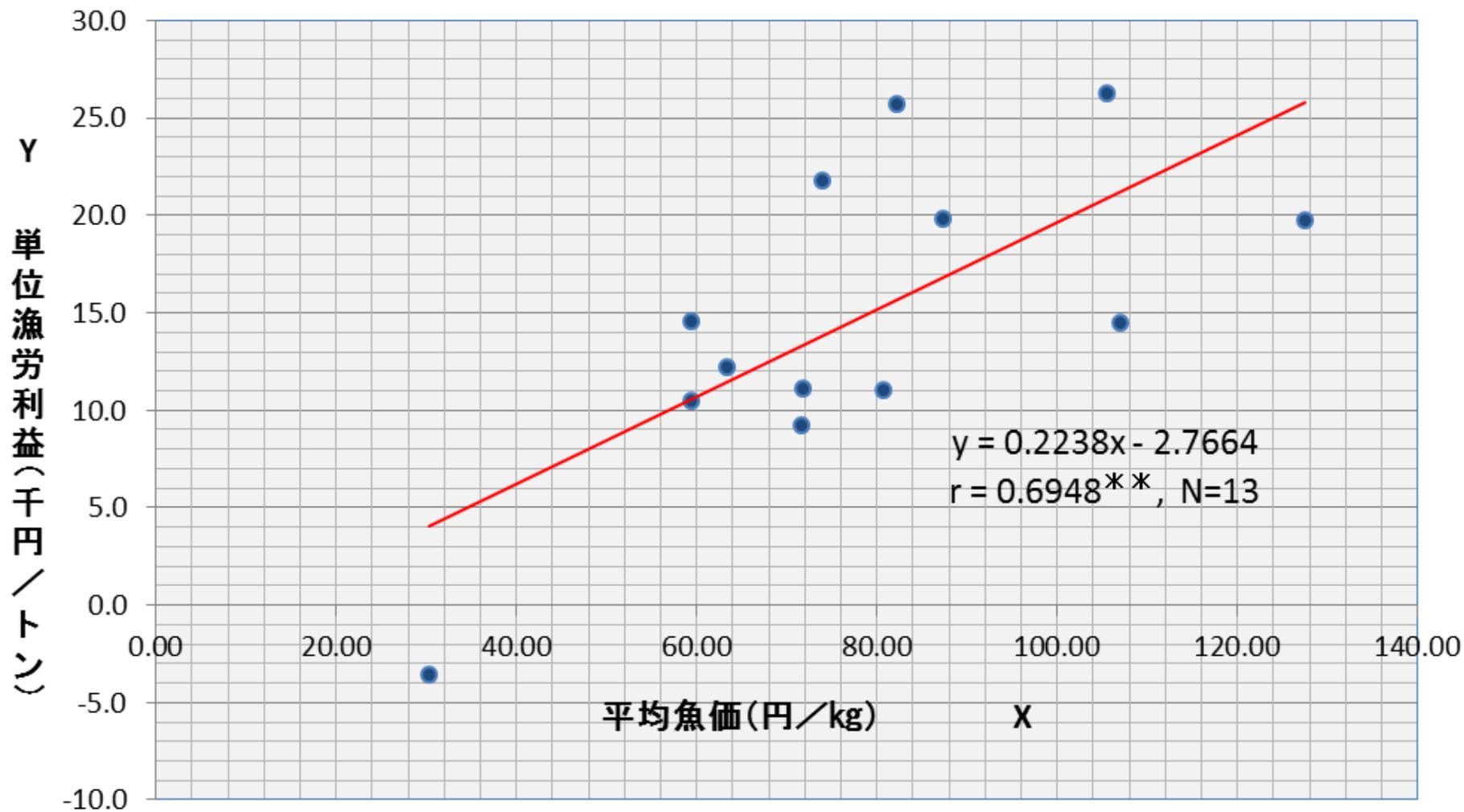


図7 A船団の平均魚価と単位漁労利益(減価償却前)の関係

- サバの平均魚価と単位漁労利益(減価償却前)の関係を見ると、両者の間には高い相関関係(危険率1%)が成立している。この図から、平均魚価が1円/kg上昇すれば、単位漁労利益(減価償却前)は224円/トン上昇することが読み取れる。

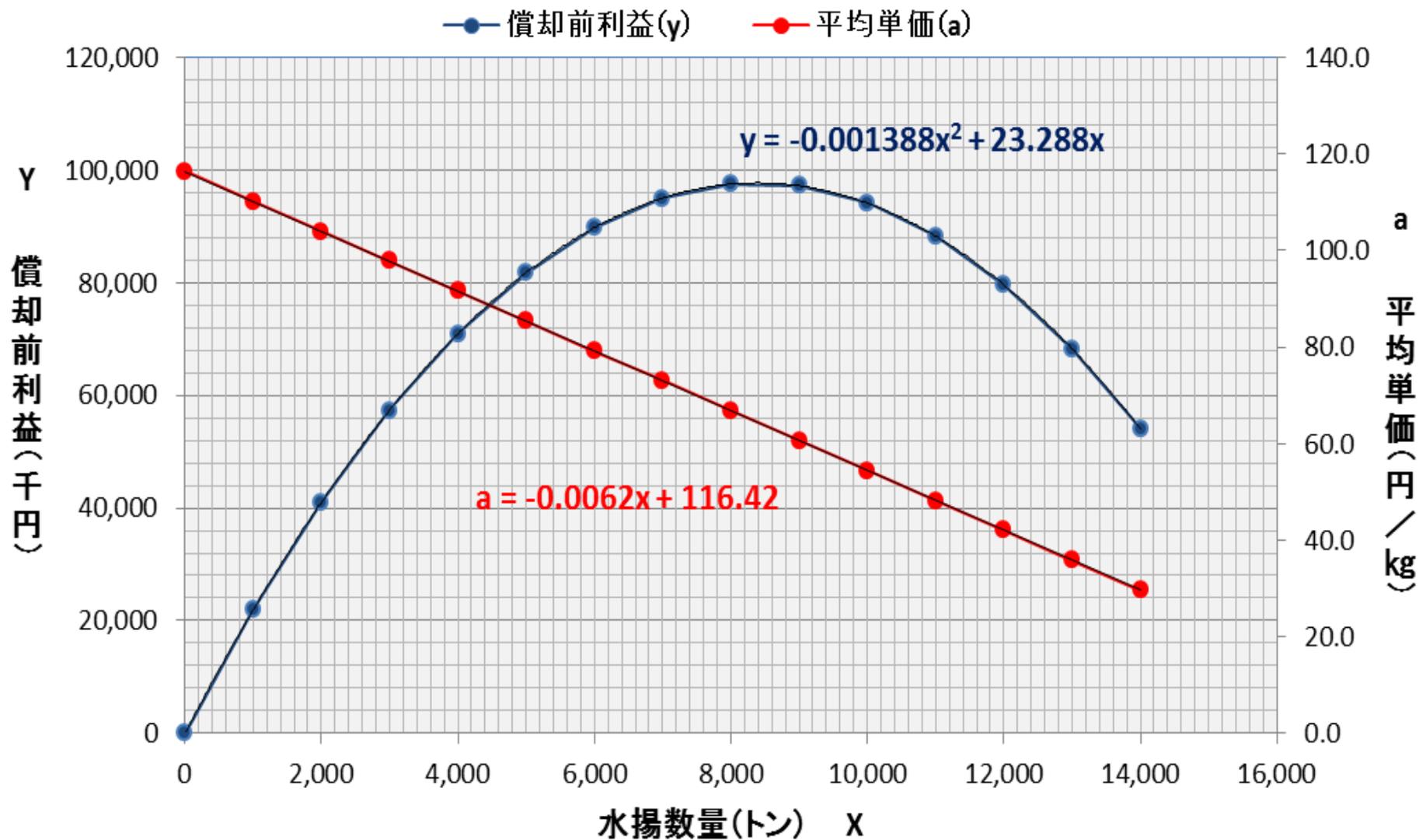


図8 A船団の水揚数量に対する漁労利益(減価償却前)と平均単価の関係

- 図3及び図7で成立した関係式に基づき、A船団における水揚数量に対する漁労利益(減価償却前)と平均魚価の関係をシミュレーションすると、上図のように整理できる。すなわち、漁労利益(減価償却前)は、水揚量約8,400トンで最大値の約9,800万円を示すと試算される。

IV. 総合考察

- ① A船団は、平成19年以降、北部太平洋まき網漁連が管理する個別割当方式(IQ)に参加しているが、平成23年以前は慢性的な赤字経営の状況にあった。これは、この時期のIQが単なる努力目標にすぎず、実質的には機能していなかったことをうかがわせる。
- ② しかし、IQが本格化した平成26年以降は、償却前漁労利益の顕著な増加が認められており、直近の平成29年にはサバ漁業だけで約8千5百万円の黒字を計上し、損益分岐点比率(100×損益分岐点売上／漁労売上:基準値80%未満)も75%を示し経営の健全性が認められるなど、IQ導入の効果が現れている。
- ③ なお、現在のサバの水揚量(約8千トン)は最大利益をもたらす水準に近いと考えられるが、IQ枠の範囲内においても需給バランス等を勘案し、総合的な観点から水揚げ目標を立てる必要があると思われる。

おわり

